

「小さな物語」の作者になること

蘇南高等学校長 小川幸司

はじめに

令和2年度が今日でしめくくりになります。終業式にあたって、最近、私が読んだり見たりした三つの手紙のことを紹介します。

1 ひとつめの手紙

まずひとつめは、大桑村野尻にお住いの女性から届きました。その一部を読みますね。

——実は、三月一日の十二時半に中津川に行って大きな荷物を持って電車を降りたところ、後ろから来た女子高校生の一人が、荷物を持ちましようと言って、持ってくれました。野尻は電車を降りると急な階段を30段ほど登り、また降りることになります。年寄りの小さな体の私にはとても過酷なことです。とても助かりました。制服で、蘇南高校の生徒さんだという事はわかったのですが、どちらの娘さんかわからず何もお礼ができませんでした。人に親切にすることというのは、結構勇気の要ることだと思います。去年から今年にかけてコロナ・災害・大雪等暗い話ばかりでしたが、本当に感動した一日でした。蘇南高校には素晴らしい生徒さんがいらっしやると思うと、同じ長野県人として誇らしい限りです。本当にありがとうございました。

私はこの手紙を読んで、皆さんか卒業生の誰かが、ご年配の女性ににっこり微笑みかけた光景が目に見えようでした。荷物を持ってあげただけでなく、その方が歩くペースにあわせてゆっくり寄り添ってホームの階段を登ってあげたのでしょう。

2 ふたつめのビデオレター

ふたつめは、卒業生からの手紙です。受験のためにどうしても卒業式に出られなかった生徒がいて、先日、第二次卒業式を開催しました。とても感動的な第二次卒業式で、卒業学年がこの日のために、全員の夢を語るビデオレターを作ってくれていました。そのデータを預かった先生が、そのとき、もうひとつのビデオレターのファイルがあることに気が付きました。なんと卒業式の前後に3年生全員が秘密のうちに作ってくれた「先生、ありがとうビデオレター」だったのです。3年生たちは、コロナ臨時休校から学校が再開したときに、「先生、ありがとうアルバム」を作ってくれ、卒業するときに「先生、ありがとうビデオレター」を作り、そっと置いて行ってくれたのでした。

私はこの手紙の存在を知ったとき、正直に言うと、涙が流れました。そして3年生たちのことを何と格好いいのだろうと憧れました。

3 みつつめの本の中の手紙

みつつめは、私に届いたというよりも私が読んだ本の中の手紙です。今年の3月11日は、東日本大震災から10年が経ったことになり、テレビや新聞では大規模な特集が組まれました。それらとはすると、あるパターン化されたストーリーとして展開されます。それは大津波によって家族を

失ったり、福島第一原子力発電所の事故で住むべき故郷を失ったりしたのだけれど、懸命に努力して復興という未来を見つめている…といったストーリーです。私はこれを「大きな物語」と呼んでいます。

「大きな物語」は間違っただけを言っているわけではなくて、確かにそうなのだろうと思います。けれどもそこには落とし穴があって、本当にすべての人が、今、復興という未来を見つめているのか、そうではない人の声が聞こえていないのではないかという問題点があります。たとえば、福島第一原子力発電所の立地している双葉町を中心に、今もなお、帰還できない地域が約 350 平方キロに及んでいます。(20 キロ×20 キロと考えれば、南木曾駅と中津川駅の距離を一片とした正方形の面積を想像してみよう。) 大震災によって最大 16 万人が避難したわけですが、今でも 3 万 5 千人もの方が故郷に帰れていません。メルトダウンした核燃料の残骸(デブリ)を取り出すめどはたっておらず、当初、40 年かかると説明されていた廃炉作業は到底その年数で解決するものではありません。福島第一原発の土地を再利用するまでには 300 年がかかるという報告書もあります。

「大きな物語」のもうひとつの落とし穴は、たとえば津波で家族を失った人が、かなしんでいるという光景を見て、私たちは「かなしいのだ」と認識する、その理解の仕方がとても薄っぺらいものであることに気が付かないでいることです。最近、金菱清さんという社会学者が編集した『永訣——あの日のわたしへ手紙をつづる』という本を読んで、私ははっとしました。この本には、今を生きる被災者の方々が、10 年前の自分に手紙を書くという設定で、思いを文章にこめています。この本の一番初めに登場する目黒紹(たすく)さんという、現在 20 歳の青年が書いた、10 年前の自分への手紙に次のような一節があります。

——十年前の私、あなたは同じことの繰り返しのような日々を過ごし、少し退屈な小学校生活を送っているかもしれません。特に何もない日々。しかしそれはとてもかけがえのない、そして普通ではないことだとすぐにあなたは理解するでしょう。

2011 年 3 月 11 日にあなたの人生は大きく変わります。信じられないかもしれませんが、その年、その日に大地震が起こり、津波が発生し、その津波が街を、建物を、そしてたくさんの人までもをも一瞬で飲み込んでしまいます。そのたくさんの人の中に、あなたのお父さんが含まれています。(中略)

地震の次の日、状況を伝えに来た相馬市役所の方々から、お父さんは地震の直後、お父さんの上司にあたる人が今後の計画について話す前に、海へバリケードを張りに行った、と聞くことができました。(中略)

もし、あなたがお父さんに「地震が来る。津波が来るよ」と伝えられるなら、真剣に伝えてみてください。あなたのお父さんのことです。真剣に聞いてくれるはずです。もし、あなたが、もし私のことを信じるができなかったり、伝える勇気が出ないのならば、せめてこれだけは 3 月 11 日の朝、お父さんに伝えてください。

「朝ごはんの目玉焼き、今までで一番おいしかったよ。行ってきます」。

私はこの言葉が言えなかった。日常の中のたった一言、二言をわざわざ伝える必要がないと感じていました。でも、伝えられなかったことを今までずっと後悔しています。私のように後悔することがないように伝えたいこと、伝える必要がないなと思ったことでも全部伝えてみてください。ちなみに、今の私の得意料理は目玉焼きです。

(金菱清編『永訣——あの日のわたしへ手紙をつづる』新曜社、2021 年)

これが手紙の一節です。つまり、目黒さんがお父さんを失った「かなしみ」は、具体的に言えば、10 年前の 3 月 11 日に、おいしい目玉焼きを朝食に作ってくれたお父さんに「ありがとう。おいしかったよ。」と言わずに家を出てきてしまったまま、お父さんにその言葉を永遠に言えなくなっ

まった「かなしみ」なのです。目黒さんは、当たり前前の日常の何気ないことにこそ、とても大切な幸せと、家族の思いやりがつまっていることに気づき、3月11日より前にそのことに気づけなかったことに、今もなお悲しんでいるのです。

ひとことで「かなしみ」といっても、このように「かなしみ」には具体的な「すがた」(=表情)があるのです。そうしたすがたを表すストーリーを、私は「小さな物語」と呼んでいます。

4 「小さな物語」は大きな力を持っている

今日、紹介した手紙をすべて振り返ってみましょう。

野尻駅で女性の荷物をもってあげた生徒のやさしさも、卒業式の後にそっと「先生、ありがとうビデオ」を残していった3年生のやさしさも、ニュースで報道されるわけではなく、この世界の片隅で人知れず咲いた花のような存在なのだと思います。それはまさしく「小さな物語」。でもその「小さな物語」は、私たちにたくさんの気づきと感動を与えてくれます。たとえば、最初の手紙の中にあった「人に親切にすることとは、結構勇気の要ることだ」という言葉に、私ははっとしました。そうですね。やさしく生きる人は、勇気のある人なのです。卒業式の頃に秘密にビデオを作ろうと動いていた3年生は、その勇気を横につながられる人たちだったのだと改めて思います。そして三つ目の「小さな物語」は、人生ではとにかく思いを伝えていこうと語りかけてくれます。その言葉のように、大桑村の女性も卒業生たちも、思いを蘇南高校に伝えてくれたのです。

すぐに忘れていく「大きな物語」と違って、「小さな物語」は心に大きな余韻を残してくれるのです。

皆さんの前にある教科書とかインターネット・マスメディアの情報の多くは、「大きな物語」です。その奥にある「小さな物語」をどれだけ見つけていけるのかが、とても大事なことだと私は考えています。(「大きな物語」ではなく「小さな物語」に注目する哲学的な姿勢を、ポストモダニズムと言います。または、「脱構築(ディスコンストラクション)する思考」などとも言います。)

1年生が「産業社会と人間」の授業において木曾で働く大人たちの生き方をインタビューしたのは、まさに「小さな物語」を見つける旅のようなものでした。2年生が「総合探究」で取り組み始めているのは、社会の課題を解決しようとする自分自身の「小さな物語」をつくることです。

「小さな物語」を見つけれられる人は、世の中の多くがひとつの方向に流されようとしても、自分はこう思うという「自分自身の考え」をもつことができるでしょう。そして目の前の人々のために「自分自身の行動」をうみだすことができるでしょう。「小さな物語」は「大きな力」を持っているのです。

次は4月6日の始業式に、ひとつ学年を上げた皆さんと再会し、新しい「小さな物語」をつくっていきたく私は思っています。

わずか10日あまりの短い春休みですが、どんなことでもいいから、この春休みにも、「小さな物語」がうまれるといいですね。